

研究開発実施状況報告書

住所 静岡県浜松市中区下池川町34番3号
管理機関名 学校法人 信愛学園
代表者名 服部 泰啓

令和元年度地域との協働による高等学校教育改革推進事業に係る研究開発の実施状況を、下記のとおり報告します。

記

1 事業の実施期間

令和 元 年 5 月 31 日 (契約締結日) ～ 令和2年 3 月 30 日

2 指定校名・類型

学校名 浜松学芸高等学校
学校長名 内藤 純一
類型 地域魅力化型 (C1910)

3 研究開発名

「地域創造コース」による地域の活性化に挑む学校

4 研究開発概要

地域を学ぶESDの視点を反映した各教科横断型のカリキュラム化を通じて、地域に魅力化に向けた共同学習を行います。活動を通して地域の人と生徒を「つなぐ化」、地域の魅力の「見える化」に取り組みます。地域企業と協働してクエストエデュケーションを実践し、地域の課題に主体的に関わり協働して問題解決にあたる生徒を育成します。

5 教育課程の特例の活用の有無

無し

6 管理機関の取組・支援実績

(1) コンソーシアムについて

①コンソーシアムの構成団体

機関名	機関の代表者名
学校法人 信愛学園 理事長	服部 泰啓
株式会社サツ川製作所	薩川 敏
遠州ビジネス交流会	水野 久美子
浜松ベジタブル	池田 克信
株式会社 白井商事	白井 成治
永田木材 株式会社	永田 琢也
ヤタローグループ	渡部 尚樹
浜松学芸高校 校長	内藤 純一
浜松学芸高校 副校長	原田 豊治
浜松学芸高校 教頭	内田 敏勝
浜松学外高校 普通科長	藤井 茂
プロジェクトリーダー (教諭)	大木島 詳弘

②活動日程・活動内容

活動日程	活動内容
令和元年6月1日	コンソーシアム立ち上げ
令和元年7月23日 (第1回)	第1回全体会合 ・2020年度立ち上げる「地域創造コース」について協議し、基本的な活動方針を決定 ・地域創造コースでのコンソーシアムの役割について協議し、学校と地域の企業を結ぶコーディネーター役となることに決定
令和元年8月8日	コンソーシアムによる異業種交流 ・コンソーシアムメンバーの所属する遠州ビジネス交流会の会員との交流の場を設定し、協働時の協力体制を確認
令和元年10月3日 (第2回)	第2回全体会合 ・地域創造コース初年度の取り組みについて協議し、コンソーシアムメンバーの担当するプロジェクト学習の内容・時期について決定
令和元年10月21日	第55回中部私学教育研修会 ・これまでの取り組みと地域創造コースの取り組み内容と成果について、成果報告を実施
令和元年11月9日	本校での成果報告会 ・本年度の取り組み内容と成果について、本校でコンソーシアムメンバーや地域の生徒・保護者に対して報告会を実施
令和元年11月14日	遠州ビジネス交流会主催成果報告会 ・コンソーシアムメンバーの働きかけにより、遠州ビジネス交流会主催でこれまでの取り組み内容と成果、地域創造コースの構想について報告会を実施
令和元年11月27日	天竜中学校教員研修会 ・市内の教員に対し、これまでの取り組み内容と成果、地域創造コースの構想について報告と意見交換会を実施
令和2年2月1日 (第3回)	第3回全体会合 ・令和2年度に実施するカリキュラムとプロジェクトを担当するコンソーシアムのメンバー、取り組みに対する評価の考え方と方法について意見交換し方針を決定
令和2年3月	予定していたコンソーシアム会議を中止

(2) カリキュラム開発等専門家又は海外交流アドバイザーについて

①指定した人材・雇用形態・高等学校における位置付けについて

皇學館大学 岸川 政之 氏 (都度依頼し年額一括払い)

年2回の直接指導とメールでの資料のチェック

②活動日程・活動内容

活動日程	活動内容
令和元年8月24日	第4回全国高校生SBP交流フェアにて ・地域創造コース全体構想についてと実施プロジェクトの位置づけについて協議・指導 ・プロジェクト型学習とクエストエデュケーションの棲み分けについて協議
令和元年10月	メールにてカリキュラム指導 ・地域創造コースでの実施プロジェクトの系統性について指導
令和2年1月29日	皇學館大学にて直接指導 ・実施プロジェクトのカリキュラム構成・教育的検証と評価方法について協議

(3) 地域協働学習実施支援員について

①指定した人材・雇用形態・高等学校における位置付けについて

本校退職教員 小川 良徳 氏 (非常勤職員として雇用)

都度依頼し行政やプロフェッショナルとの交渉をコーディネート

②実施日程・実施内容

地域協働学習実施支援員の活動実績について、具体的に記入すること。

日程	内容
令和元年8月	浜松市役所との休耕田プロジェクトの交渉

(4) 運営指導委員会について

①運営指導委員会の構成員

氏名	所属・職	備考
学校法人 信愛学園 理事長	服部 泰啓	
浜松学芸高校 校長	内藤 純一	
浜松学芸高校 副校長	原田 豊治	
浜松学芸高校 教頭	内田 敏勝	
浜松学外高校 普通科長	藤井 茂	
プロジェクトリーダー (教諭)	大木島 詳弘	

②活動日程・活動内容

本校では地域創造コースの先行実践を考案・検証する場として、運営指導委員会を中心とした「運営委員会」と様々な研修に取り組む「T-Labo」を組織し、それぞれ隔週で実践状況の報告と共有を行った。

活動日程	活動内容
運営委員会 11回(1月現在) 4/8・22・5/13・27・6/10・7/2・9/2・10/7・ 11/18・12/9・1/20	年度の実践研究構想に基づき、プロジェクトの進行状況や問題点の報告共有を行い、実践が適切に行われるよう指導・助言を行った。

T-Labo (1月現在) 4/15・5/20・6/10・7/8・10/21・11/11・ 11/25・12/16・1/9・1/27	実践研究の目的や内容の共有を通して、学校設定科目として地域創造(概論・実践)の系統的实践の議論や評価(ルーブリックや観点別評価)について議論を行った。
--	---

(5) 管理機関における取組について

①管理機関(コンソーシアム含む)における主体的な取組について

本校のコンソーシアムは地域の異業種交流会のメンバーを中心に、本校運営指導員を加えた構成となっています。特にコンソーシアムの外部メンバーは研究実践を協働する実践パートナーでもあり、また必要な地域人材と学校を繋ぐコーディネーターとしての役割の両面を持っています。そのため、地域創造の取り組みの拡散や地域人材との意見交流の場を多く設定し、支援体制の確立に取り組みました。

10月31日 第55回 中部私学教育研修会	本研究指定に至るまでの先行実践内容と、地域創造コースに向けたカリキュラムや実践の教育的意義について、研究報告を行う場を設定いただいた。実践内容に多くの学校から興味を持っていただき、学校視察につながった。
11月9日(コンソーシアム) 学校での成果報告会	地域の保護者や生徒(小～中学生)に向けて、成果発表の場を設定した。これまで制作した地域の魅力を発信するポスターやフォトブックの展示だけでなく、制作したCMや動画の上映会、外部評価を受けるために出場したコンテスト等で行ったプレゼンの実施などを行った。
11月14日(コンソーシアム) 遠州ビジネス交流会成での 成果報告	コンソーシアムの外部メンバーを中心に、地域の様々な企業に対して地域魅力化の実践と成果・検証の報告会を企画設定していただいた。報告の後、多くの企業や参加者に取り組みに対して興味を持っていただき、実践プロジェクトの製品化や市販化への協力・助言をいただいた。後に摘果ミカンプロジェクトについて生徒のプレゼンの場へとつながり、地域とつながる場として大きな成果を得られた。
11月27日 天竜中学校での教育研修会	市内の公立中学校教員に向けて本研究のカリキュラムと実践の教育的意義について、報告と共有を行った。研修会での発表後、設定したカリキュラムでの進学についての質問や様々なプロジェクトを実践していく際の課題の確認など、相互に交流することができ、実践の拡散と共有が進んだ。
1月23日 5校での実践交流会	愛知県・三重県・神奈川県・静岡県より、探究的な活動に取り組む学校や文部科学省の本研究指定校・アソシエート校と学校視察や実践紹介を行った。視察は生徒の取り組みの見学や交流だけでなく、カリキュラムとしての設定や学校設定科目としての位置づけ・取り組みの教育的検証についてディスカッションを行うなど、参加校との情報共有を行った。その中で、次年度の協働実践のアイデアなども生まれた。

②事業終了後の自走を見据えた取組について

本研究ではコンソーシアムメンバーは会議体として機能してきました。しかし、コンソーシアムの主な役割は生徒の興味関心と地域の企業やプロフェッショナルの方とを繋ぐ役割、つまり地域と学校を結びつける役割でした。事業終了後も、この地域と学校を結びつける役割として、コンソーシアムの外部メンバーの方々の力を借り、継続して協働していく体勢を整えることができました。また具体的に協働プロジェクトを担当していただくことで、本事業に主体的に関わっていただきます。

③高等学校と地域の協働による取組に関する協定文書等の締結状況について

浜松市より「青春はままつ応援隊」として地域の魅力発信を委託されている。

(年度ごと4月に締結)

7 研究開発の実績

(1) 実施日程

実施項目	実施日程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
森林公園 CM・PR 動画プロジェクト		2回	2回	2回	2回	4回						
浜名湖海苔メニュー開発		2回	2回									
浴衣イベント「浴衣 DeNight」プロジェクト		4回	5回	2回	4回	4回						
青森県鱈ヶ沢高校との協働ポスタープロジェクト				1回		1回	3回					
天浜線フォトブック&カレンダー制作			1回	1回		1回	1回		2回			
摘果ミカンプロジェクト						2回	1回		2回	1回		
浴衣生地アパレルプロジェクト (企業制服・スカート制作)			2回	2回		2回	2回	2回				
注染浴衣フォトカタログ 2020								1回	2回	5回	2回	
観光甲子園を通じた観光魅力発信プロジェクト								4回	2回	4回		
シビックパワーバトル浜松市代表として魅力発信プロジェクト				2回	2回	2回	4回		4回	4回		
第4回全国高校生SBP交流フェアでの成果報告	8回	2回	2回	8回	8回							

(2) 実績の説明

- ①研究開発の内容や地域課題研究の内容について
- ②地域との協働による探究的な学びを実現する学習内容の教育課程内における位置付け（各教科・科目や総合的な学習（探究）の時間、学校設定教科・科目等）
- ③地域との協働による探究的な学びを取り入れた各科目等における学習を相互に関連させ、教科等横断的な学習とする取組について
- ④類型毎の趣旨に応じた取組について
- ⑤成果の普及方法・実績について

本年度の本校の地域魅力発信は、探究活動として生徒が自主的に取り組む課外活動で取り組んでいます。令和2年度からスタートする地域創造コースで実践するプロジェクト型学習やクエストエデュケーションの先行実践の意味づけで、教材化に向けた検証を行う場として社会科学部地域調査班の生徒がそれぞれの興味関心に応じたプロジェクトに取り組んでいます。

<p>森林公園 CM・PR 動画プロジェクト</p>	<p>①浜松市北部にある静岡県立森林公園と協働で利用客増加のための施設紹介CMの制作（動画制作と楽曲制作による Art の視点からの魅力発信の一般化）</p> <p>②課外活動の探究活動として実践</p> <p>③本プロジェクトは森林公園での丹念なフィールド調査と利用客の統計分析を実施し問題点の明確化を行った。これは「地域創造概論」の教科・科目を見据えている。制作に当たっては、情報科や音楽・美術科との連携を行った。</p> <p>④地域の魅力発信は、広報活動に十分な予算が割けない地方の企業や団体にとっては大きな課題である。高校生が取り組むことで、新しい視点を盛り込むことができた。</p> <p>⑤制作した CM はコンソーシアムの力を借りて、異業種交流会での成果披露を行った。また完成の様子は新聞に掲載されたり、施設でも webCM されて利用しており、利用客が 2 割増加した結果につながった。</p>
<p>浜名湖海苔メニュー開発</p>	<p>①浜名湖養殖海苔 200 周年記念メニューの開発（地域食材の魅力発信）</p> <p>②課外活動の探究活動として実践</p> <p>③本校でのプロジェクト実践は生徒の興味関心に応じて自由に組み立てられ、その都度必要な協力を他教科の教員の支援を受けている。このプロジェクトでは、家庭科の協力をうけ、校内施設を利用している。</p> <p>④本プロジェクトはコンソーシアムのメンバーでもあるヤタローグループとの協働であり、コンソーシアムによるクエストエデュケーションの先行実践として取り組んだ。</p> <p>⑤完成披露は新聞に掲載。現在、宿泊施設奥浜名湖荘にて昼食メニューとして提供中である。</p>
<p>浴衣イベント「浴衣 DeNight」プロジェクト</p>	<p>①浜松市北部のフルーツパークとの協働による創作盆踊りのイベント「浴衣 DeNight」実施（地場産業の注染浴衣の魅力発信）</p> <p>②課外活動の探究活動として実践</p> <p>③体育では創作ダンスを取り入れており、多くの人々が参加できる創作盆踊りの振り付けを考案した。着付けなどは、地域のプロフェッショナルの力を借りて生徒たちが勉強会を実施した。</p> <p>④地場産業の注染浴衣の魅力発信は 3 年目となるが、「浴衣の生産の街から、浴衣を着てみたいくなる街づくり」をスローガンに、あえて人口減少が進む浜松市北部で実施した。若者が気軽に参加できるシステムづくりをめざして、振付や運営も生徒と卒業生の協働で取り組んだ。</p> <p>⑤実施に関しては多くの企業や自治体から後援をいただいた。当日は約 100 名の参加者と約 400 名の来場者を集め、新聞やテレビニュースで報道された。</p>
<p>青森県鱒ヶ沢高校との協働ポスタープロジェクト</p>	<p>①青森県立鱒ヶ沢高校との地域魅力発信ポスター協働制作プロジェクト（本校ポスター制作プロジェクトによる魅力発信の教材化検証）</p> <p>②課外活動の探究活動として実践</p> <p>③本校が得意として取り組んできた Art の力で地域の魅力発信するプロジェクトとして実施した。綿密なフィールド調査と地域魅力の再発見し、これを美術、特に画像編集の技術を用いてポスター化に取り組んだ。</p> <p>④「地域の魅力は観光地など特別な場所ではなく、自分たちの日常にあふれている」という、これまでの本校の取り組みを通じて生徒が感じてきたことを、他地域でも共有するための取り組みとして実践した。さらに、本校だけでなくポスタープロジェクトが他地域でも単独実践できるように、教材としてのプラットフォーム化をするための問題点の検証を行った。</p> <p>⑤3 日間の合宿としてアイディアソン形式で行った。現地行政のバックアップもあり、完成したポスター作品は現地新聞にも大きく掲載され、他者の視点を取り入れた魅力化の取り組みは社説でも取り上げられた。</p>
<p>天浜線フォトブック&カレンダー制作</p>	<p>①天竜浜名湖鉄道との協働で継続しているポスタープロジェクト（魅力発信の継続と活動目的の共有化・教材化への取り組み）</p> <p>②課外活動の探究活動として実践</p> <p>③地域魅力発信のスタートとなった地元鉄道会社との協働であり、SNS などを通じて発信することへの取り組みへと発展した。ポスター制作のレイアウトや言葉など教科横断的な取り組みの基本を習得する。</p> <p>④活動初期より取り組んだ天浜線のポスタープロジェクトは、フィールド調査により現地で魅力の発見に取り組んでいる。フィールド調査の手法や受け継がれてきた想いの共有化など、活動を持続させる手法を検証している。</p> <p>⑤SNS で公開し発信していく中で、地元テレビ局から番組へのオファーが来るようになってきている。</p>

<p>摘果ミカンプロジェクト</p>	<p>①摘果ミカンを用いた商品開発プロジェクト (地元食材を用いたプロフェッショナルとの協働) ②課外活動の探究活動として実践 ③学校の家庭科の施設、地元のミカン農家、コンソーシアムの企業の力を借り、協働して商品開発のプロセスを追う農業の六次産業化に挑戦しているプロジェクトである。 ④フィールド調査から見つけた耕作放棄地増加の問題に、商品開発を通じて活性化に挑戦するプロジェクトである。コンソーシアムの食品企業の力を借りながら、農業の六次産業化に挑戦している。販売企業へのプレゼンや安全検査など、商品化のプロセスを追うクエストエデュケーションの先行実践と位置づけている。 ⑤本年度スタートしたばかりで、現在は販売企業へのプレゼンを行ったところである。来年度、市販化を目指して長期的に取り組むクエストとしている。</p>
<p>浴衣生地 アパレルプロジェクト (企業制服・スカート制作)</p>	<p>①地場産業の浴衣企業との協働による企業制服の開発プロジェクト (注染浴衣メーカーと協働した商品開発プロセス検証) ②課外活動の探究活動として実践 ③デザインの歴史や技術など芸術系教員の力を借りながら、織り・縫製・型紙など地域のプロフェッショナルの力や、大学の染色の専門家の力を借り、アイデアを形にする取り組みである。 ④地場産業の活用として、企業の制服受注や一般販売の衣服を制作するなど、地域の魅力的な産業の現代化に挑戦している。地場産業への愛着と誇りを形成することに成果を上げている。 ⑤制服化プロジェクトは、すでに企業からの受注に成功しており、テレビ番組で特集されるなど注目されている。現在は、継続した制作への問題解決に取り組んでいる。さらに、伝統的な染色手法を現代的な生地へ応用する試験的な取り組みに発展している。</p>
<p>注染浴衣 フォトカタログ 2020</p>	<p>①地場産業の注染浴衣のカタログ制作プロジェクト (企業の商品魅力の発信と制作プロセスの検証) ②課外活動の探究活動として実践 ③これまで蓄積したポスター制作のノウハウを地元企業に還元し、広告宣伝に関わる経済的な効果の検証を行う。 ④地場産業従事者は、産業の空洞化に伴う減少と高齢化に直面している。広告宣伝に関するアイデアが少なく、この点をポスター制作で蓄積したノウハウを還元する長期クエストエデュケーションの先行実践として継続している。 ⑤この活動を通じて、染色や服飾など進路決定に大きな変化が生じており、生徒が学ぶ意義を見いだすきっかけになっている。また、活動に参加したくて本校を志望する生徒も現れたりしている。</p>
<p>2019 全国高等学校グローバル観光コンテスト(観光甲子園)を通じた観光魅力発信プロジェクト</p>	<p>①地域の魅力を生かしたインバウンド向け観光プランの構築プロジェクト (フィールド調査の結果を活かした観光プランの構築と発信) ②課外活動の探究活動として実践 ③学校設定教科の「地域創造」で蓄積したフィールド調査の結果を活かして、観光プランの構築に挑戦するプロジェクトを教材化する。 ④地域調査概論・演習を通じて蓄積した地域の魅力を観光プラン化することで、これまでの活動を構造化したり、表現・プレゼンしたりする力の育成に取り組んだ。自分たちの活動や考えを外部からの視点で評価していただくことで、多面的・多角的な視野の育成につながっている。 ⑤「住んでいる人が好きな街は、訪れる人も幸せな街」をコンセプトに、身近な景観の魅力をプラン化した。全国 10 校の最終選考に挑み、プレゼン・動画発表を行い全国第 1 位となった。</p>
<p>シビックパワーバトル 2019 浜松市代表としての魅力発信プロジェクト</p>	<p>①地域の魅力を発信する大会への参加 (地域魅力発信のプレゼン制作と発表技術の向上) ②課外活動の探究活動として実践 ③学校設定教科の「地域創造」で蓄積したフィールド調査の結果を活かして、オープンデータを用いた統計分析で地域の魅力を可視化し、その結果を反映したプレゼンテーション資料を作成する。浜松市からの委託案件で、行政との協働事例として取り組んだ。 ④地域調査概論・演習を通じて蓄積した地域の魅力をプレゼン資料とすることで、これまでの活動を構造化したり、表現・プレゼンしたりする力の育成に取り組んだ。自分たちの活動や考えを外部からの視点で評価していただくことで、多面的・多角的な視野の育成につながっている。 ⑤幕張で行われたオープンガバメント推進協議会主催のシビックパワーバトル 2019 で浜松市代表として出場し、全国 1 位となる最優秀賞を受賞した。</p>

<p>第4回全国高校生SBP交流フェアでの成果報告</p>	<p>①注染浴衣生地を用いた制服化プロジェクトの報告発表 (地域魅力化の取り組みの発表と外部視点の導入)</p> <p>②課外活動の探究活動として実践</p> <p>③ビジネスの観点を用いた全国各地の様々な取り組みを発表する場であり、活動を通じた相互交流や他者の視点を取り入れる機会として有効である。また客観的な評価の場を設けることで、生徒の取り組みの目標として位置づけている。</p> <p>④地域の魅力を発信する場として、外部評価を得られるだけでなく生徒同士の交流の場があるため、広い視野の育成に大きな効果があった。</p> <p>⑤交流の結果から、青森県鱒ヶ沢高校との協働に発展したように、本校の活動フォーマットを広めていく効果があった。また、本年度は本校の活動に興味ももっていただいた紀南高校からの活動視察の実現と協働プロジェクトの打診へとつながった。</p>
-------------------------------	--

(3) 研究開発の実施体制について

①地域との協働による探究的な学びを実現するためのカリキュラム・マネジメントの推進体制

本校での地域魅力化の研究実践は、高校1年生次に行うプロジェクト型学習と高校2年～3年次にかけて行うクエストエデュケーションに分かれており、地域の魅力発信に系統的に取り組むカリキュラムを構築しました。

高校1年生次に行われるプロジェクト型学習ではコンソーシアムのメンバーの企業が担当し、課題解決型の教材を構築して実施します。高校2年生次以降のクエストエデュケーションでは、コンソーシアムのメンバーが生徒のアイデアと地域の企業を橋渡しする役割を担い、学校と地域の企業との協働体勢を推進していきます。

カリキュラムとして確立させるために社会科学部地域調査班で先行実施していたクエストエデュケーションが、大きな成果を生み始めました。2年にわたり取り組んで来た地域の観光プランの構築では、観光甲子園2019にて外部評価を受け全国1位となる成果を得ることができました。他にも多くの実践を重ねることで、問題点や期待される成果が見え始め、カリキュラム・教材としてプラットフォーム化する目処がつかしました。こうした取り組みを、運営指導委員会やT-Laboで共有・検証することが、カリキュラム・マネジメント上、非常に有効であったと感じました。

②学校全体の研究開発体制について(教師の役割、それを支援する体制について)

本実践においては、地域創造コースが40名定員を予定しており、1クラス体制での実践を想定しています。そのため、中心となる教員(プロジェクトリーダー)が実践およびコーディネーターの役割を担っています。教師自身が地域をつながり積極的に実践活動を発信していくことで、生徒の興味関心と地域を結びつけた実践を行うファシリテーターとしての役割が強くなりました。

その中で適切に実施していくためには、進捗状況や課題の迅速な確認・共有が必要でした。本校では運営指導委員会とT-Laboを通して定期的に報告・状況共有を行うことで様々な視点やアイデアを導入し、実践者一人に偏ることなく学校全体で取り組みを支援する体制とすることができました。

③学校長の下で、研究開発の進捗管理を行い、定期的な確認や成果の検証・評価等を通じ、計画・方法を改善していく仕組みについて

上記の②で報告した学内の組織として、運営指導委員会とT-Laboが隔週交互に開催する仕組みを整え、定期的な検証の機会を設定することができました。

④カリキュラム開発に対するコンソーシアムにおける取組について

カリキュラムについては、高校1年生次にはプロジェクト型学習を系統的に行い、高校2～3年生次にはクエストエデュケーションとして実施していきます。上記①に報告したように、高校1年生次に

行われるプロジェクト型学習ではコンソーシアムのメンバーの企業が担当し、課題解決型の教材を構築して実施します。高校2年生次以降のクエストエデュケーションでは、コンソーシアムのメンバーが生徒のアイデアと地域の企業を繋ぎ、学校と地域の企業との協働を推進する大きな役目を担うようになりました。

また、コンソーシアムでは、新コースで実施するカリキュラムについても検討を行いました。その中で、1年生次は学校側から提示したプロジェクトに取り組み、課題解決への基本的なプロセスを学んでいくようにしました。その際、実施するプロジェクトは教員が指導・ファシリテートするのではなく、コンソーシアムのメンバーによって課題提示や助言指導を行っていただくようにしました。カリキュラムの構築だけでなく、実際にカリキュラムに位置づけられた1つのプロジェクトを担当することで、教材としての運営方法や課題をチェックしていただくよう計画しました。

8 目標の進捗状況、成果、評価

研究全体における初年度は、カリキュラムの作成と、これまでの取り組みや先行実践の教材化、そして成果発表の3点の目標を設定しました。

カリキュラム開発については、高校1~3年次にわたる実践カレンダーを作成し、高校1年生次の各プロジェクト実践内容はほぼ固めることができました。学校設定科目として「地域創造（概論・実践）」で実施する事が決まり、活動曜日や総時間なども計算して実践カレンダーを制作中です。

教材化については、地域の魅力を発信する活動としてポスターやCM制作を行っていました。特にSTEAM教育のArtに注目し、Artを「アイデアを形にする力」と捉え、実践に取り入れてきました。本年度はポスター作成の取り組みを教材としてパッケージ化に取り組み、地域外の学校との実践でその効果を検証しました。具体的には青森県立鱒ヶ沢高校と協働で制作にあたり、地域魅力発信に大きな効果があることを確認できました。さらに他県の2校より同様のオファーをいただき、活動の拡散効果として今後の手応えを感じました。

成果発表については2つの視点で取り組みました。1つは地域に向けた取り組み成果の報告です。昨年度は本校で実施している探究活動の紹介として実施し、67件の訪問申し込みであったのに対し、本年度は実践研究成果発表として実施したところ約100件の増加となり、高い注目を集めることができました。もう一つは、校外への成果発表と外部評価の場として全国規模のコンテスト3件（第4回全国高校生SBP交流フェア・シビックパワーバトル2019・2019全国高等学校グローバル観光コンテスト）に参加し、全国大会本戦で取り組み内容をプレゼンしました。シビックパワーバトルとグローバル観光コンテストにおいては、全国1位となる評価をいただき、生徒の自己肯定感を高めるとともにクエストエデュケーションの成果発表として有効であったと感じました。

9 次年度以降の課題及び改善点

本年度の実践を振り返り、次年次以降の課題として以下の3点を考えています。

①プロジェクト型学習の系統性

来年度スタートする地域創造コースの高校1年生用のカリキュラムとして、2~3ヶ月で行う小プロジェクトを設定しました。高校2年次から行うクエストエデュケーションに繋げるため、地域魅力発信の取り組みをいかに系統的に学ぶかという点が大きな課題です。次年度から学校設定科目で行うプロジェクト型学習では、「視点の変化→多様なアプローチ方法→視点やアイデアの融合」という系統性を持たせています。このカリキュラムの実施効果の検証が大きな課題となっています。

②教科横断型学習の実施体制

本年度は、教科横断型の実践として、地域の魅力を詰め込んだ観光プランを構築する観光甲子園に挑戦しました。この観光プロジェクトは、構想・動画制作・プレゼンテーションの3点から成っており、プロジェクトリーダーの私だけでなく美術や英語・情報の教員と協働で指導に当たりました。これにより、多くの視点で地域を捉えたり自分たちの活動を振り返ったりする機会を得ることができ、プロジェクトの実施には大きな成果となりました。今後、こうしたプロジェクト型学習において教科横断型の取り組みでの協働体制や教職員の共通理解が課題です。次年度はこうした教科横断の協働実践を積み重ねていき、本研究3年目には学校での共通実践に移行できるよう体制の整備を進めていきたいと考えています。

③先行実践の効果検証と教材化

社会科学部地域調査班では、地域魅力化型指定以前より多くの地域魅力発信の取り組みを先行実践してきました。その結果、青森県鱒ヶ沢高校との協働で取り組んだ地域の魅力発信ポスター制作については、小プロジェクト実践の教材としてのフォーマットを確立し、教材としてパッケージ化することに成功しました。本校ではまだ多くのプロジェクトを実践しており、今後はこの実践の教育的効果の検証と他地域へ波及させる教材化へ挑戦することを課題とします。特にポスターやCM制作、創作盆踊りのイベント企画などは、既存の学力でははかれないArtの観点を取り入れた取り組みであり、こうした生徒の多様な価値観で表現するESDの実践として、多くの学校で実践できる仕組み作りに向き合いたいと考えています。

【担当者】

担当課	普通科 地域創造コース	TEL	053-471-5336
氏名	大木島 詳弘	FAX	053-475-2395
職名	教諭	e-mail	gakugei.s36@gmail.com